

消費者

まぼら

食品安全委 意見交換会

参加たった2割

「情報収集の場」 業者が殺到

リスコムユニケーション リスクに関係する人が情報や意見を交換し、理解を深める過程。世界的には一九八〇年代から、食品の安全性や化学物質の人への影響といった環境問題などを巡って注目されるようになり、日本でも九〇年代に入って広まった。「マニナス面の情報も出すことや、双方向のやり取りで共に考えることが従来の情報提供と違う点」(木下富雄・甲子園大学長)とされる。

消費者に来てほしいのに会場は業界の人ばかり。食品の安全性について知識を深めてもらうため、内閣府の食品安全委員会などが昨年からはじめた意見交換会「リスコムユニケーション」は、肝心の消費者が二割弱しか加わっていないことが、同委のアンケートで分かった。参加者のほとんどは食品業者と行政関係者。同委は一般人のPRに懸命だが、「リスコムユニケーション」は消費者にまだなじみが薄いと頭を悩ませている。

チラシ1万戸

六月八日に仙台市で開かれた意見交換会。多くの消費者に来てもらおうと、食品安全委は、会場周辺の約一万戸に折り返しチラシを配布した。だが、参加者の七割は食品業者と行政関係

者で、消費者は二割。同委では、毎回百―三百人の参加は「チラシを見て来た人は数人」とがっかり。会場では、米産牛肉の輸入停止に悩む牛タン業者が「牛タンは仙台の食文化。一日も早い輸入再開をお願いしたい」と切実に訴えた。

官の出席3割

「リスコムユニケーション」は、BSE(牛海綿状脳症)狂牛病)問題で消費者への対応が混乱したとの反省から、同委が昨年七月の発足後から始めた。農水、厚生労働両省などとも、これまでに四十八回の意見交換会を開催。うち約三十回は一般消費者向け

で、毎回百―三百人の参加者を集める。専門家にによる食品添加物やBSE問題については、米産牛肉の輸入停止に悩む牛タン業者が「牛タンは仙台の食文化。一日も早い輸入再開をお願いしたい」と切実に訴えた。

同委は「子育て中の主婦が子供が食べるのをちょっと心配」と思っただけを運んでくれるのが理想と、ホームページや消費者団体を通じて参加を呼びかけているが、消費者からは「リスコムユニケーション」の意味がよく分からない、「PRが足りない」との声もある。ほとんどが平日の午後に行われているため、「子供を預けられないと行けない」との不満も寄せられている。

「今は試行錯誤」
一方、意見交換会は業界関係者にとって、貴重な情報収集の機会となっており、どの交換会でも、食品業者や行政関係者が殺到するという実情がある。仙台市の牛タン店経営者らが作る「仙台牛たん振興会」の

「子供が食べるのをちょっと心配」と思っただけを運んでくれるのが理想と、ホームページや消費者団体を通じて参加を呼びかけているが、消費者からは「リスコムユニケーション」の意味がよく分からない、「PRが足りない」との声もある。ほとんどが平日の午後に行われているため、「子供を預けられないと行けない」との不満も寄せられている。

「試行錯誤」
「試行錯誤」
「試行錯誤」